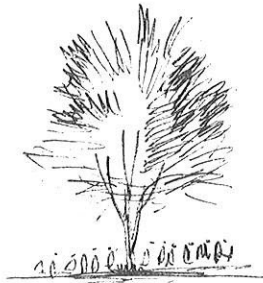


光の子



No.90 2000. 12. 15

- わたしを尋ね求めるものは見いだし、心を尽くして求めるものは、
出会うであろう…と主はいわれる。(エレミヤ 29:13-14)



「おいもほり」

え・中島英子

「山眠る」

山すべて映して黙す秋の湖

混浴の出で湯愉しも豊の秋

月光を滑らせてゐる滑り台

夕日濃くなる藁塚の立ててより

行く秋のどこに坐しても水のこゑ

抱へたる冬瓜のさて置きどころ

山眠るぐんぐん空を青ませて

黛 執 (『春野』主宰)

2つの文化に生きる

24

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京子

以前はYMCAや専門学校に出かけていて英語を教えていたが、数年前から自宅で英語を教え始めた。別に生徒を募集している訳ではないが、今は二〇人程の小学生、中学生、社会人が出入りしている。英語を習いたい、話せるようになりたいと思っている人は多いものだとつくづく感じる。私自身、中学生時代、英語をなんとか話せるようになりたいと思い、近所で英語が話せる人がいれば教科書を読んで録音してもらったり、英語の物語を暗記してみたり、会話学校へ通ってみたりと、様々なことを試みていた。今考えてみるとあの頃は日本語以外の言葉を話すことに底知れない魅力を感じ、英語で海外の人たちと話ができるなんて夢のま

た夢のようなことのように思っていた。あれから・一〇年たった今、私の毎日は丸で一日三度の食事をするのと同じようにごくあたりまえに英語を話している。これは中学生時代の私にしてみれば、すごいことなのだが、英語を話し始めた頃の感動等、どこかへ行ってしまっている。先日、JAL T（全国語学教育学会）の国際大会に出席した。ここ数年、夫と一緒にこの学会には参加している。去年は前橋で、今年は静岡で開催された。毎回、たくさんの刺激をもらっている。言ってみれば、英語教育に関して年に一度の唯一の外からの刺激である。国内外で英語教育で活躍している人たちの講義を多々聞くことができる。

今年、その中で一つ、面白い発題があった。子どもへのグローバル教育を行っているものだったが、英語教育を通してグローバル（つまり地球全体の）教育を子どもたちに教えようというものだ。その教育機関の理念は「英語は人と人とのコミュニケーションの一手段であり、英語教育の目標は国際理解教育の実現にある」である。果たしてこの国際理解教育とは何かというと、「多様な文化が存在し、人間も他の生き物も

相互依存の関係で生きる世界で、地球市民としての責任を果たし、同時に自己の可能性を活かして豊かな人生を送るのに必要な生きる力『知識』『姿勢』『技能』を身につけるための学習であり教育である」ということだった。何だか難しく感じるが、要するに私達がいつも勉強している英語は単なる道具（技能）ではないということである。「Hi! How are you?」「Fine, thank you.」などの会話パターンをいくつも覚えたとして、それで英会話ができるとは決して言えないのだ。肝心なのはその人が本当に伝えたいこと、話したいことを持っているかということである。会話とは決り文句で交わらせるようなものではない。これは海外に少しでも住んだことのある人や親しい外国の友達がいる人は痛感していることだと思う。

この教育方針に基づく、教育内容が環境、平和、異文化コミュニケーション、国別研究等に分かれていて、具体的には食べ物や生活用品のトイレットペーパーにいたるまでを題材にしている。トイレットペーパーを使っている人達はこの地球上でたったの三〇パーセントに満たないことや自分が実際、一日に使っているトイレットペーパーの量を予想し、そして実際に長さを計ってみる。そして、その材料はどこからどのように出来たのかなども調べてみる。ちよつとした社会勉強だが、それを英語で表現するところに面白さがある。但し、英語はそれらを表現するための道具ではない。

自宅に帰って相変わらず子どもたちに英語を教えるがらふと「最近、英語を話していて感動がなくなったのは英語は単なる交流の道具ではないことがわかったからだ。」と思った。

アルファベットも読めなかったような子どもたちが単語が読めるようになり、文章が理解できるようになるのを見るのは本当に頼もしいものだ。しかし、本当に大切なものは、一人一人がなにか語れるかなのだ。英語教育の底の深さを知り、教え、学ぶことがまだまだあることを知らされている日々である。



子どもたちの学習

竹花 信恵

創立当初、まるで保育園のように幼い子どもたちばかりだったこの家も、今では、過半数を中高生が占めている。進路を考える大事な時期の子どもたちの大きな課題は、学習への取り組みである。なかなか「勉強、大好き」な子どもは見受けられない。というより、勉強で自信を持った経験がないといった方がいいかも知れない。学校に行くことが、当たり前でなかった子どももいる。どうやって勉強から逃げるか、どうやって楽な方にくかに傾いていく子どもたちと、なんとかしたい職員と、時にはトラブルに発展する場面さえあった。会議の大半が学習指導についてであった日々もある。

昨年度は、初めて、大学への道が子どもたち自身の努力で切り開かれた。残っている子どもたちにとつて、学習への態度を学び、一回り大人になって元気に学生生活を送っている姿が、よい刺激になり具体的な目標になったようで、今年は意欲的な子どもたちが増え学習会も活発になってきている。

年度当初、学習記録表を一人一人に作った。それを眺めて、「どうせ、こんな作ったって、一ヶ月で終わるになるよね。」と互いの根気のなさを感じた。あれから・一〇年たった今、私の毎日は丸で一日三度の食事をするのと同じようにごくあたりまえに英語を話している。これは中学生時代の私にしてみれば、すごいことなのだが、英語を話し始めた頃の感動等、どこかへ行ってしまっている。先日、JAL T（全国語学教育学会）の国際大会に出席した。ここ数年、夫と一緒にこの学会には参加している。去年は前橋で、今年は静岡で開催された。毎回、たくさんの刺激をもらっている。言ってみれば、英語教育に関して年に一度の唯一の外からの刺激である。国内外で英語教育で活躍している人たちの講義を多々聞くことができる。



■ エッセイ ■ 苦しい中間報告

「今月は休日が入りますので、七日までお願いします。十二枚ですが。」

或る俳句雑誌の編集部からの電話である。

私は毎月のこの電話には、決まっております。七日の午前中に着くようにします。」

つまり、私はその雑誌にカットを描いているのである。毎月十一枚、多いときで十四枚ぐらいである。一回分だけを考えて十二、三枚という、極めて楽な事のようにであるが、一年を通してみると百四、五十枚になり、これはなかなか大ごとなのである。

「はいわかりました、七日の午前中までに。」と答えてみたものの、六日の夕方までに宅配便に乗せなければならぬ。そうしなければ七日の午前中までに東京へは着かない。

その六日が半日でも空いていて予定がないときは良いが、それがダメな時には、五日の夜のうちに仕上げる必要に迫られることになる。私の苦しみはそこからはじまるのである。

彫刻家 中島 陸雄

そもそもこの仕事を依頼された時、家内は反対した。以前に彼女は創刊百年にもなる或る児童教育雑誌に毎月イラスト一枚カット十枚を四年間描き続けたことがある。五百枚を超える絵を描いた。

スタートの頃は軽い気持ちで、お茶のこさいさいで描いていたが、次第に苦しくなってきた。身の回りにある細々とした物を描いていたのだが、みんな描き切ってしまつて、新しい物が見つからないのである。描くことはいつも苦ではないのだが、何を描いて良いのかわからなくなつてきて、苦しみだすのである。そんな時には、よく小旅行をしたものだ。旅行先で、土産物屋に寄りこんで、今まで扱った事のない品々を観察したり、買いこんだりしながら描いたという苦い経験を、彼女は持っているのである。

しかも、カットとなると、紙面の中の小さな空間に小さく入れるだけで、カットそのものに目を止める人は少ない。そこにボツとあるだけで、何となしに潤いを与えてるだけが命である。

したがって、私が十二、三枚のカットを引き受ける時に「甘く見ないでね。きつと苦しくなるから。」と、反対したのである。

ところが、人には義理もあれば人情もある。それに、意気に感ずる、というのもある。

そんなわけで私は、家内が心配し反対するのをよそに「快諾」したのであった。

「さて、描いてくるか。」と、私はスケッチブックと懐中電灯を持って外に出ようとしていた。五日の夕食の後である。家内も何か小さい子どもの絵を描いていた。

「九時半になったら、お互いの仕事の進み具合を見せ合ひましょう。」と家内が言った。私が怠けてしまうのを防ぐために、中間報告をせよ、というのである。

私は、あかりをつけて外に出た。シユウカイドウの花、サザンカの花、ジゲのブルーの実と草などをちぎってみた。ギンナンも落ちてゐる。しゃがみ込んで拾ってみると、いちようの葉も黄色く色づいて落ちてゐる。

「金色のちいさき鳥の形をしていちよう散るなり夕日の丘に」という歌を思い出す。或る先生から伝え聞いた「いちよう教るなり丘の夕日に」と、どちらにしようかと悩んだ与謝



野晶子のこととも思い出す。まちがってボタンを押すと、いちようの木の下は、人工の光の全く見えない暗黒の世界であった。その暗黒の中で、夕日の丘を想像してみると、「丘の夕日に」のほうが歌としては良いのかな、とも思えた。

いくつかのモチーフを拾ったりち切ったりしたものを、アトリエに持っていつて、鉛筆描きしてみた。その後墨を入れるのであるが、約束の九時半である。中間報告の時間である。しかし夜のうちに仕上げる見通しはついた。

「心配ないんだよ、始めれば早いんだから。今月のテーマは晩秋の庭ということにしよう。」と、全く苦しまなかつた顔をして、私は中間報告をしたのである。

学者もどきのつづき ④⑤ 中国再び

山形大学医学部

学部長 仙道 富土郎

何年前になるか、この欄に中国旅行記を書かせてもらった。その時は飛行機で中国を横断した形で、中国大陸があまりにも不毛の山々で覆われていることに驚嘆し、食糧のことなどを考えると、少子化政策もむべなるかなと思つた。

この度の旅は、山形大学医学部と姉妹校関係にある浙江大学医学部と華北省の唐山市にある華北煤炭医学院との交流のためのものであった。

上海空港に到着してから帰路の北京空港にたどり着くまで、ごく一部を除いては陸の旅であった。空から眺めた前回の旅の感想が早とちりであつたことを、今回の陸の旅で思い知らされることになる。新たに作られた縦横無尽とも言える高速自動車道は、行けども行けども平野が続く、果てしない感じではある。やはり山と言

い、野と言ひ、中国は小さな島国の我が国とは比べるべくもない。異様な対照も見た。道路網はいたるところで更に拡張、延長されているのだが、その作業の殆どが、言わば手作業でされている。古い道路を労働者たちはつるはしで砕き、リヤカーや三輪車で運んでいる様子は、片道四車線の高速道路とあまりにも対照的であつた。

一方、上海近郊の高速道路の道沿いには、何やらさびやかな、げびたと言へば少し軽蔑的な表現になつてしまふが、そんな感じの豪邸が建ち並ぶ。通訳の人に聞くと、一定の農作物の作付が成功した、いわゆる万戸戸であると言ふ。万戸戸どころか、今では百万戸も沢山あると彼は言う。文化大革命の時に、地方に下放された青年たちが北京に帰つて来てたどり着いたという、先日テレビで見た北京の下町の薄暗い裏通りとは、これまたあまりにも対照的なのである。テレビの中で、元下放青年の初老の男が、「帰つて来た時は、職業の選択の自由は無かつた。国は我々に何をしてくれただか」と元下放青年の同窓会で叫んで、成功したと思われる他の男に逆にやり返されている様は、この国の一つの縮図のようでもある。隣国に住む人間の一人としてもつらい思いである。

上海から小生の教室に留学してきた日君の話が、二重写しになる。

整形外科教室から来た彼が、日本留学三年目に故郷に帰つた時の話である。「教授は人工関節を入れるような高価な手術だけをやりたがり、法外なお金を得ている。何でも金、金で、あんな国に帰るのはいやだ」。彼の訴える眼が潤んでいたのを覚えている。日君は昨年三月、無事に大学院を終え博士号を取得して、米国の大学にポストドクトラルフェローとして就職し、今、元気にやっている。

一方、若者たちの素晴らしい姿も見せてもらった。煤炭医学院を訪問した時の話である。姉妹校間の研究者交流で山形大学医学部に短期間研修に来たことが契機になつて、大変な苦難を経た後、山形大学に論文を提出して医学博士を取得したN先生が、煤炭医学院の整形外科の主任教授をしている。

我々訪中団の一同は、病院長の案内で整形外科の病棟を訪れた。N教授は、医学部の学生に一生懸命何かを説明していた。驚いたことに、病院長に続いて我々が入室すると、椅子に座つてN教授の説明を聞いている数名の医学生が、一同サツと起立したのである。N教授としばらく話をしていたが、医学生らは起立したまま、一向に椅子に座ろうとしな

い。気の毒になつて、私がN教授に求めて彼らに座つてもらつたような次第である。

N教授は、学生に筒状に丸めたポスター様の紙を持って来させ、それをボードに留めて、自分たちが開発した手術方式について我々に説明し始めた。しかし、丸めてあつた紙はどうしてもまっすぐに広がらず、元のように丸まつてしまふ。と、一人の学生が立つてきて、丸くまつてしまふ紙の端を片手でボードに押さえつけた。

中国では、まだ金属の黒(白)板に紙を貼つておくマグネットのようなものは、あまり使われていないらしい。何と彼は、N教授がその説明を終えるまで紙を押さえたままであつた。誰に催促されるでもなく、こんな仕草を自然にしよう青年たちをまぶしく感じた。一学年千人以上もいるという、医学生が全員住んでいる寮に案内された。十八歳にしてはあまりにもあどけない少女たちの眼は輝き、希望に満ちていた。

魯迅が愛したという紹興市の酒場で、美味な紹興酒に酔いしれながら、この国のこれからのことなどを想つた。



プリズム

光の中で

佐藤家

晩秋から初冬にかけての風もぐつと冷たさを加え続けています。

小三の憲一は、小二の弟尚二と共に、三月にやってきました。早くも七ヶ月が過ぎ、尚二は人なつこく、学校にもすぐにとけ込め、友だちも何人かできたのですが、憲一は学校では自分の殻に閉じこもり、友だちがなかなかできずにいました。

彼をそうさせたひとつに、「自分は人より勉強が遅れている劣等生だ」という思いがあったようです。この兄弟は、この家に来る前、交代で病気の母の看病をし、また住む場所も定まらなかったために、殆ど学校に通うことができませんでした。そして、憲一は兄として弟をかばいもし、励ましながら必死で生きてきました。この家でも、まだ自分のことを本当の意味で解放できず、いろんな感情を出すのを我慢している節があります。

その彼が、第四二回埼玉県児童絵



画コンクールで羽生市議会議長賞という誉れを得ることができたのです。家の者も学校の先生も大喜びでしたが、一番嬉しかったのは憲一自身だったろうと思います。このことが大きな自信につながり、マイナスの自己イメージを克服することになればと願っています。

梶原 完

河のほとり

倉澤家

十月末、中一の美深が仲間に加わり倉澤家は若草物語のような四姉妹プラス私と娘、女ばかりの六人家族となった。

長女は少々口うるさいが私の不在時には家のことを全て任せてくれるほどに成長した高二の亜紀。次女は妙に落ち着き減多なことでは動じない冷静な高一の沙慧。三女はこのところ学習に意欲的に取り組み成績をアップさせ何でも無難にこなす中二の幸子。末っ子は人所問もないというのにつつと前からいるようにすっかない賑やかな中一の美深。

女の子が三人寄れば何とか・というが、それが倍の人数なので、やがましき二乗の倉澤家である。

しかし、女だけということでは本のささいなことが原因で冷戦状態になることもある。そんな時に大事な役割をしてくれるのが次女の沙慧。誰からもすかれ、一目を置かれていた沙慧は、みんなが自分の味方になっ

てほしい、と思っているようで、相談されることも多いようだが、いつでも中立で冷静な判断を下し、決して誰の味方にもならない。「どっちもどっちだよ。」とボンリいわれると終わるのである。相手の話をきくと聞いてあげられる『聞き上手』が沙慧の魅力のようで、それだけで問題が半分くらいは解決していることもある様子。

ということで、沙慧の存在が倉澤家のチームワークを維持するのに大いに役立っていることは間違いない。

倉澤 智子



子どもたちの季節

仙道家

暑い暑い夏が終わり、秋を迎え、やがて冬となりました。子どもたちの着ている衣類も半袖から長袖、またその上にフリースやジャンパーと重ねられ、洋服から季節の移り変わりを感ぜさせられます。

夏が大好き、薄着大好きな暑がりが佳美も、さすがに涼しくなった秋の風に耐えきれず、十月初旬衣替えをしました。秋冬物の衣装ケースを開け、中味を交換。ところがたくさんあつたはずの衣類が、何と、どれもこれもツンツルテン。また、もうくたくたになつていてお気に入りだから処分できなかった服を大切にしまつて置いたり、この冬も長くおつきあいのできそうな服が、ごくわずかしかなければ驚かされました。

毎日一緒にいると見逃してしまう成長を、この一夏の成長を実感できる何とも嬉しい瞬間です。

そして、次に待っているのは、新しい洋服の準備です。今日、佳美と二人、暖かい衣類を買いにでかけました。

小三の元気盛りです。汚れが目立たず安くて気に入るものを探しに二



軒のお店を回りました。洋服にはこだわる佳美で、微妙な色合い、形、何でもいい、という訳にはいかないのです。お友だちが持っているものと同じでもないのです。難しい。それでも何とか、サイズなど気に入るものを買うことができました。

この四月、一人仙道家に加わった佳美。担当、家生活環境が変わり不安だったのでしよう。理由も分からず、毎晩のように泣いていた彼女も、今は明るく「お休み」といって明かりを消して眠りにつきます。

藤本 曜子

原田家日記

この秋、幼稚園から中学、高校までそれぞれ運動会が行われ、子どもたちが躍動し演技する輝くような姿を見ることができました。

七月に原田家に加わった五歳の宗和は、光の子どもの家に来る前に長期間の入院生活を送っていました。

そのため、当初は二・三歩歩いては転倒する、走るなど考えられな

いほどおぼつかない状態でした。そんな宗和が二学期から幼稚園に入園したのです。幼稚園に休まず通っていることだけでもすごいことなのに、宗和は炎天下での厳しい運動会の練習に全力で励んでいたのです。

相当な疲れのためか、幼稚園から帰ってくると、理由もなく愚図って泣いたり不機嫌な日々が続いていました。私には「よく頑張っているね」と、その疲れた小さな身体を抱きしめることしかできませんでした。

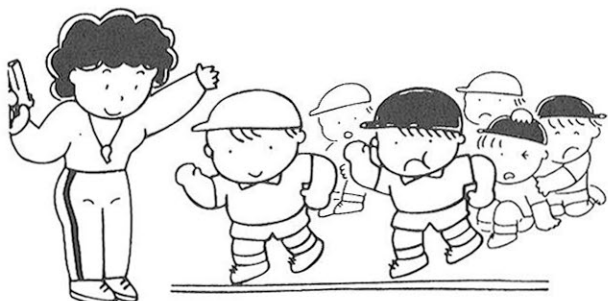
本番にうまくやれるかどうかよりも、それまで頑張る心が続くかどうか不安で心配なことでした。

運動会当日、私はみんなと一緒にリズムに乗ってダンスを踊り、苦手を駆けつっこも一人を抜くことができ、入退場の行進も体操も、大きく胸を

張ってやっている、輝くような宗和の勇姿を目の当たりにして、目を疑いました。何よりの宗和自身がとても楽しそうに溶け込んでいて、終始満面の笑顔でいたことは何よりも嬉しいことでした。

長く熱かった夏休みの疲れが出ていたこの時、幾まわりも大きく成長した宗和を見て、落ち込みがちな私の日常に、「そんなことで下を向いてはダメだよ」と教えられたとともに、大きなパワーをもらった運動会でした。

服部 沙絵子



流れ 2

菅原 哲男

児童養護施設は、社会福祉施設のなかで最も古い歴史を経過してきた施設の一つである。と前号に書いた。もう一度、一九五〇年以前の子どもたちに対する社会的な保護や養育について考えてみたい。

特に石井十次、留岡幸助、有馬四郎助、佐竹晋次郎など、明治期から大正デモクラシーへの流れをつくった大きな足跡を残した人々について、詳しくその人となりなどについて知識を得ようとしなかったこれまでが恥ずかしく思えて仕方がない。

彼らの殆どがキリスト者であり、その信仰と生き方が重なって余りのない姿の気高さは、何よりもこの国が半世紀を費やし、経済と引き替えにするようにして失ってしまったものではないかと思うのである。

戦後の状況は、何よりも衣食住の生理的・安全の欲求という最も基礎的な欲求の充足に全力を傾けなければならなかったことは確かなことであつた。

しかし、アメリカの心理学者マズローは、その書『モチベーションとパーソナリティ』で、基礎的な欲求

が充足してくると、より高次の欲求が表出されて社会的文化的に高い次元へと移行していくものであると欲求の種類を規定して論じた（一五五）

が、わが国の状況や自らのそれを省みるときに、この理論が欠陥だったのか、それともこの国や、この国に住む自らが持つ、欠損だらけの卑しい遺伝子のなせる業なのかと疑わざるをえないのである。

衣食がこんなに足りても礼節の回復が現れてこないのである。

不景気といわれて十年にもなるのだろうか。そして景気回復のためにたくさんのお金を重ねているのは本当に正しい選択なのだろうか。一九六五年頃からの高度経済成長、また一九八〇年代のバブル経済などをわれわれもまた基準にしていって、不景気を嘆いているのではないかと思うのである。

前述したように、住はともかく、衣食は飽和状態になるまでに至る経過のなかで、失つてはいけないものをどれほど失っているのかを考えなければならぬのではないだろうか。繰り返しになるが、一九五〇年代

以前の社会事業に関わる人たちは顔がはつきり見えていた。そして、社会福祉学などという怪しげな分野の人々が、犠牲や憐れみの自慰的行為の象徴として退けた慈善事業が集めていた、社会的信頼と世間の尊敬を殆ど食いつぶしてしまっているのが現状なのである。そのことの一つの証左として、光の子どもの家をはじめとする私が関わってきたいづれの児童養護施設のある地域でも、悪さをした子どもに、「そんな悪い子は〇〇に入れてもらからねえ」とたしなめるのである。

志に生きた人々の営為は、信仰、信条、思想を実現しようとした生き方であり、信頼と尊敬を集めるに充分な気高いものであつたのである。そのような人々の営為に含まれている気高さの原点とも言えるものに「愛」があつたのだと思うのである。愛は隣人のために自ら痛む行為、肉体を伴うものだったのである。愛は無償の行為そのものであつたのである。

愛の行為が報酬を求めるときに、気高さから卑しさへと墮落するのである。売春を援助交際と言いかえても愛に報酬を求めることの卑しさは変わらないのである。その事実をこそを想起し、覚知し、大切にしなければならなかったものなのではなかつたのかと、この頃痛切に思うのである。

この国が見失つた、あらゆる意味での『このころざし』を、今こそ人と人の関係の中に復活させなければならぬ時ではないのか。ひとり一人がこの国を形成する一億二千万分の一の存在として、この国に責任を持つものなのであるのだから。それにしても、多くの国々が自国の安全のために、何百回か全生物を死滅させる兵器を持つてしまった人類は、子どもたちに希望を持つことを可能にしているだろうか。

このままでは確実に生存が不能になるまで環境を経済に変えてきたわが国は、子どもたちに夢を与えることができるのだろうか。

自らの責任では決してない天文学的な借財を負わせられ、自らの老後を見通すことが不能になってしまったこの社会の子どもたちは、自分たちにある可能性を信じていることができるのだろうか。

パンを求めて、パンに飽き足りるようになったこの国で、パンよりも大切なものの存在を、隣人を自分と同じように愛するべきことの重大さを、今こそ、そして何よりも、子どもたちに伝えていかなければならぬ事だもではないかと思うのである。

現場から

続・光の子らしく

③

岩崎 まり子

光の子どもの家には中庭に枕木が敷いてあり、それが各家へと続いているのですが、その真ん中にシンボルツリーともいえるべき櫟の木がそびえています。十六年前は本当に頼りない若木だったのですが、いつの間にか屋根の背丈を追い抜かし大きな枝を張っています。その葉も、いつしか、カサカサと音を立てて風に追われるようになり、窓の景色は一気に秋らしくなっています。

めっきり寒くなってきましたが、いかがお過ごしでしょうか。先日十五周年記念の感謝の集いがありました。いらして下さった方、いらつしやれなかつた方、いつもお支え下さりありがとうございます。感謝の集いには、卒業生もたくさん

ん来てくれて助かりましたが、みなさんの中には、幼児が多くなっているのに驚かれた方もいらつしやるのではないのでしょうか。現在、幼児は九名になっています。私は、幼児はその中のたつた一人、一番年少の李奈だけを担当しています。

李奈ちゃんは二歳三ヶ月で乳児院からやつてきました。夏の日でした。李奈ちゃんは未熟児で生まれ、お母さんは彼女を産んですぐ亡くなつてしまいました。李奈ちゃんは、保育器から乳児院というコースをたどつてここへ来たのでした。

あれからもう一年四ヶ月経ちました。最初は、ムツとして周囲を拒否していた李奈ちゃんも徐々に心を開き

はじめ、それに伴って周りの空気も動きました。今では、「一番可愛い」の、李奈！」

とかいっています。ほつても目も口もどこもかしこもまん丸の李奈が話すと、誰も反論せず、「本当ね。李奈、可愛いもんね。」と、つい言ってしまうのです。

なぜか、笑つた顔が萌季の小さい頃にそっくりで、そのせいか、萌季がよく可愛がつくれ、抱っこしているのかされているのか、帰宅する

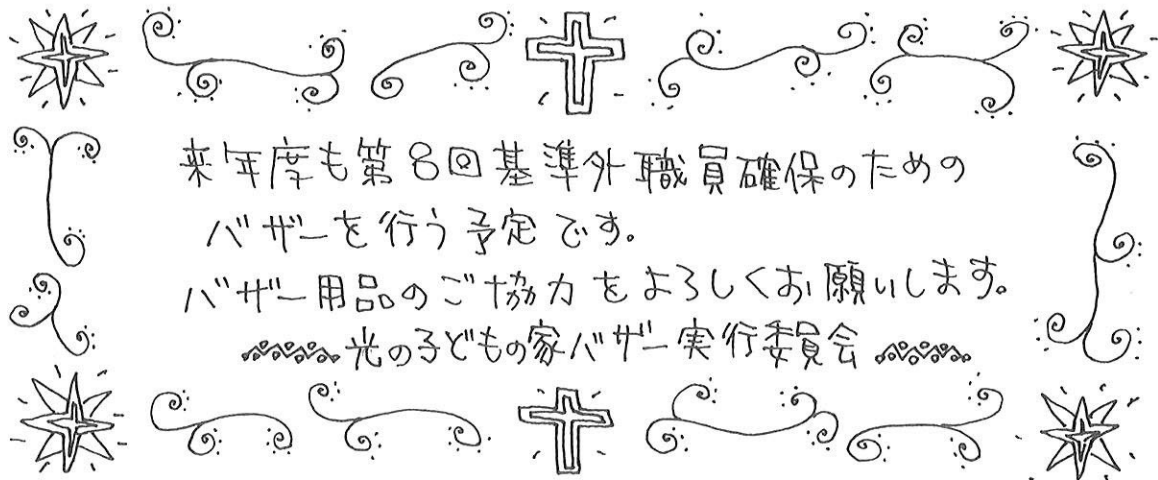
とすぐ、「李奈ー」と両手をひろげます。李奈も、「めーちー」と両手をひろげ、一瞬そだけ異国情緒が漂う世界になります。

中二の信一が、「柳の権力かよ」と称する李奈マジックがそここで展開され、その笑顔と泣きと、おどけた一瞬芸で周りを虜にしてしまうパワーが彼女にはあるようです。みんなの笑顔が集まるのです。そんな李奈ですが、時折、「しゅき？（すき）」と尋ねてきます。



「しゅき？（すき）」と尋ねてきます。





日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

6月1日 ▶ 7月末日

6月

幼児7名 小学生7名 中学生6名 高校生9名
年齢超過1名 措置外1名

5日 『しずくの会』 構内清掃整備ご奉仕 感謝

6日 国際婦人福祉協会の「子ども家庭支援センター」整備事業補助金受領会がメキシコ大使館で竹花出席

10日 定員外職員確保のための第七回バザー 聖学院大学 青山学院大学 共栄短期大学 しずくの会 光の子どもの家後援会など多くの方々のご協力です。感謝

20日 埼玉県指導監査

26日 この日より夏休み帰省のための家庭訪問を開始

今月の物品ご寄贈者 小田原バプテスト伝道所 品川福祉センター 目黒区加藤操たちばな出版(株) 板橋区(株) オキナ高橋工場長 練馬区小林茂三郎 千葉県本宮佐和子 茨城県はむこ会鹿島支部 相良有美 東大宮教会 三木二葉 春日部市リズム時計 越谷市川端秀子 川口市後藤利子 北川辺町増田博 鷺宮町戸石幸男 栗橋町小林幸子 東埼玉バプテスト教会 栗橋キリスト教会 騎西町 斉藤良子 久喜市澁谷澤 久喜俳句会 菅原満喜 加須市小谷野利子 鈴木和子 竹山美恵子 新井摂子 宮崎晴子 松本静江 野本百合子 宝月寿子 落合美佐子 小林千江子 小谷野亨 末柄久子 島崎なぎさ 岡美子 網取八重子 鎌田洋子 田部井竹子 横村スミ子 大利根町妹尾直彦 大利根藤幼稚園 遠藤千代子 小川久子の各位様 感謝。

7月

1日 太田宗和入所 原田家服部保育士担当

3日 第15回職員会議 夏休み個別計画協議開始

4日 施設長 服部 竹花がこれまでの医療・保健・福祉などの機関と帝京大学病院で太田宗和についての協議

5日 北埼玉福祉事務所より高山嬉の措置解除後の協議

6日 黛まどか L・ボウルディング(映画監督) 来訪 映画製作と子どものための基金設立のための協議

14日 第7回バザー反省会 しずくの会 聖学院 後援会

19日 第1学期終了

○ 朝霞 志木 新座各市の蕎麦組合有志の手打ち蕎麦会
夏休みオープニングパーティ

26日 この日から幼児グループ8名がハケ岳登山へ 小海町の谷本清光画伯のアトリエに宿泊して 涼しくてステキな谷本画伯の絵に囲まれた2泊3日

30日 東大宮教会学校幼・小科の夏期学校 2泊3日

今月の物品ご寄贈者 加須市しずくの会井手 若柳慶雅 梅沢三保 パーラーみずす 栗橋町黒沢自動車 久喜市青木和子 大利根町羽鳥唱平 大利根藤幼稚園

こんな暮らしの中で 礼儀や挨拶のできない中・高校生の相談 自殺未遂の母と子の家族 単身赴任で週末帰宅の夫の暴力から逃げ込む主婦など 地域ぐるみの子ども家庭の出来事に関わりながら 子どもたちの楽しい夏休みを・・・(くら)

/// ———— 反 射 光 ———— ///

☆いよいよアドヴェントです☆子どもたちが何気なく口ずさむ讃美歌が無意識からの《期待》を表現します☆クリスマスへの期待が今後の生きていく方への期待につながるようにと祈ります☆園庭の枕木の舗道を歩いていると必ず小さな子どもたちが「抱っこ」と胸に飛び込んできます☆岩崎が「現場から」に記していますが職員たちが抱っこをしないのではありません☆どの保育も男子職員もほんの少しの時間でも誰かしら抱っこしていただきます☆生んでくれた親たちから殆ど抱っこらしいことをしてもらえなかったこととの何と存在の底知れない空っぽ続きのなかと思ひ知ります☆それにしても乳児院で抱っこして授乳しているところが極ごく少数だそうです☆せめて授乳時だけでも・・・と心から望みます☆子ども達の世紀に！と祈ってはじめてた世紀は終わろうとしています☆今度こそ子ども達の世紀にするためにできることをみんなではじめなければと職員たちと語っています☆えうご加

(哲)